



Title	Protein-protein Interaction of Detergent-solubilized Ca2+-ATPase during ATP Hydrolysis Analyzed by Low-angle Laser Light Scattering Photometry Coupled with High-performance Gel Chromatography
Author(s)	木島, 祥行
Citation	大阪大学, 1990, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/37153
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	木島祥行
学位の種類	医学博士
学位記番号	9085号
学位授与の日付	平成2年3月24日
学位授与の要件	医学研究科病理系専攻
学位規則第5条第1項該当	
学位論文題目	Protein-protein Interaction of Detergent-solubilized Ca ²⁺ -ATPase during ATP Hydrolysis Analyzed by Low-angle Laser Light Scattering Photometry Coupled with High-performance Gel Chromatography (低角レーザー光散乱法による筋小胞体Ca ²⁺ -ATPaseの分子集合状態の検討)
論文審査委員	(主査) 多田道彦 (副査) 岡本光弘 教授 田川邦夫

論文内容の要旨

〔目的〕

筋小胞体(SR)によるCa²⁺輸送は筋肉の興奮収縮連関において中心的な役割を担っている。SR膜に存在するCa²⁺-ATPase(ATPase)は、ATPの化学エネルギーを、SR膜を介したCa²⁺濃度勾配(浸透圧エネルギー)に変換する酵素で、Ca²⁺のSR膜内への能動輸送を行っている。

従来、非イオン性界面活性剤(C₁₂E₈など)で可溶化したATPaseでは、モノマー(分子量11万)がATP加水分解の最小単位であると報告されている。一方、電子顕微鏡などの構造的解析および酵素学的解析は、ATPaseのSR膜内でのダイマー構造を示唆しており、そのCa²⁺能動輸送の最小機能単位は未だ明らかでない。本研究では、このダイマー構造の生理的意義を明らかにする目的で、可溶化ATPaseのATP加水分解における分子サイズを、低角レーザー光散乱法(Low-angle laser light scattering photometry; LALLS法)を用いて解析した。

〔方法〕

SRより精製したATPaseは、界面活性剤C₁₂E₈で可溶化後、LALLS法にて解析した。本法は高性能ゲルクロマトグラフィーと3つの検出器、低角レーザー光散乱計(LS)、示差屈折計(RI)、紫外吸光度計(UV)よりなり、以下の二つの式から、ポリペプチド部分の分子量(MW)とそれに結合した界面活性剤・磷脂質の結合量(δ)が決定できる。

$$MW = K_1 \cdot A^{-1} \cdot LS \cdot UV \cdot RI^{-2}$$

$$0.134\delta + 0.187 = K_2 \cdot A \cdot RI \cdot UV^{-1}$$

ここでLS、RI、UVは、それぞれ各検出器の出力を表わす。UVは280 nmでモニターした。Aは

280 nm におけるATPase の吸光係数で、定量的アミノ酸分析により $1.11 \text{ ml} \cdot \text{mg}^{-1} \cdot \text{cm}^{-1}$ と決定した。溶出緩衝液は 0.3 mg/ml C12E8, 50 $\mu\text{g}/\text{ml}$ phosphatidylcholine, 0.1 MKC1, 10 mM MgCl₂, 1.5 mM CaCl₂, 1 mM EGTA, 3.1 mM NaN₃, 20 mM Hepes/imidazol (pH 7.0) とした。カラムは、TSK G3000SW×L(2本直列)で、0.3 ml/min の流速で溶出した。更に、5 mM ATP, ADP, AMPPCP, および CaCl₂ を適宜添加し同様の実験を行った。カラムおよびLSのセルは循環水にて恒温化した。ゲル濾過中のATPase 活性は、溶出液中のPi 定量により評価した。

〔成績〕

(i) ATP 非存在下でのATPase の分子サイズ

0.8 mg のATPase は、0 °Cでモノマー(M)とダイマー(D)に分離して溶出した。その分子量はそれぞれ 125,000 ± 2,100 (n=3) および 211,300 ± 7,300 (n=3) と評価された。δ は、ATPase 蛋白質 1 g 当り M は 0.60 g, D は 0.43 g と計算された。10 °C, 20 °C では ATPase は、単一成分として溶出し、分子量は M と D の中間値 (156,000 および 178,900) を示した。

(ii) ATP 加水分解時のATPase の分子サイズ

0 °CでMとDが分離する条件下で、5 mM ATP を添加すると、1.6 mg のATPase は分子量 168,000 の単一成分として溶出し、MとDの融合が認められた。この際、分子量は蛋白質濃度依存性にM、中間値、Dと変化した。ATPase 活性は、約 90 nmol Pi · min⁻¹ · mg⁻¹ で分子量にかかわらず一定であった。5 mM ADP または AMPPCP 存在下ではMとDの融合は認められなかった。5 mM CaCl₂, 5 mM ATP 共存下で ATP 加水分解速度を抑制すると (< 20 nmol Pi · min⁻¹ · mg⁻¹), MとDは分離した。

〔総括〕

本法においてATPase のM ⇌ D間の速い相互変換は、MとDの融合および中間値の分子量として観察される。可溶化ATPase は 0 °C で相互変換が遅く M と D に分離するが、ATP 加水分解時には M と D の融合が観察され、M ⇌ D間の速い相互変換が起こることが示された。また、5 mM AMPPCP あるいは CaCl₂ 存在下の実験から、ATPase 蛋白質間相互作用は磷酸化中間体の生成過程ではなく、その分解過程で起こっている可能性が示された。以上の結果は、ATPase による SR 内への Ca²⁺ 能動輸送に際して、ATPase の蛋白質間相互作用が重要な役割を果していることを示唆する。

論文の審査結果の要旨

本研究は、可溶化膜蛋白質の分析に最適な低角レーザー光散乱法を用いて、ATP 加水分解時の筋小胞体 Ca²⁺-ATPase の蛋白質間相互作用を解析したものである。可溶化 Ca²⁺-ATPase はその酵素活性と密接に関連したモノマー・ダイマーの相互変換を示し、この蛋白質間相互作用が磷酸化中間体分解過程で起こる可能性が示された。これらの知見は、筋小胞体膜での Ca²⁺ 能動輸送に Ca²⁺-ATP

ase 蛋白質間相互作用が重要な役割を担っている可能性を示したもので、生体エネルギー変換機構を解明する上で重要な成果であり、学位に値するものと考えられる。